

1. 研究の背景と目的：

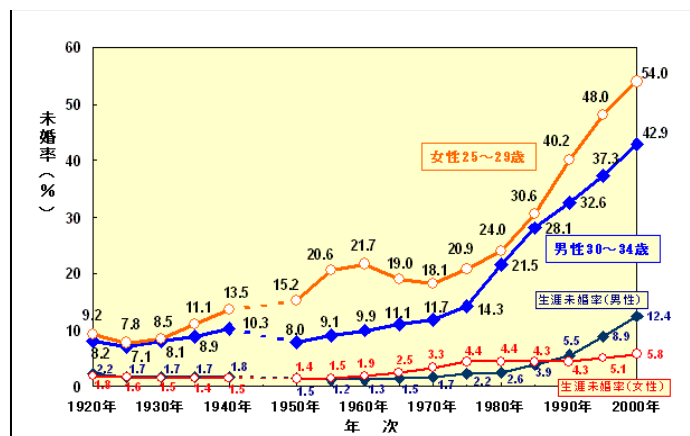
「どんなに美人で仕事ができても、30 代以上・未婚・子ナシは“女の負け犬”なのです」(『負け犬の遠吠え』(酒井、03 年) 一巻では「負け犬論」が盛んだ。実際に男女ともに未婚率が年々上昇しており、生涯未婚率(2000 年)も男性約 12%、女性約 6%となっている。このことは少子化にも少なからず影響を与えているだろう。

もちろん、「結婚=人生の成功」や「結婚=幸福」とは限らないし、「結婚しない」という価値観を否定するわけでもない。また、結婚しない人を結婚した人よりも劣っているとするつもりもない。ただ、「いい人がいれば結婚したいけれど、自分が望むような人との出会いがない」という声が多いのも事実である。

かつて、筆者もそういう思いを抱く 1 人であった。20 代は仕事で忙しく、30 代になってようやく結婚を真剣に考え始めたものの、気がつけば出会いに恵まれなくなっていた。東京・青山に職場があり、仕事柄、毎日のように新しい出会いのチャンスがあったはずなのに、また出会いに恵まれるよう、それなりの活動もしてみたが、結婚につながるような出会いは得られなかった。

人口密度の大きい都会では出会う異性の絶対数は多いはずだが、その分、同性のライバルも多い。果たして、東京にいれば地方都市よりも結婚につながる出会いは多く期待できるのか? また、そもそも、30 代になって、パートナー探しの活動をしているにも関わらず、自分が望むような相手にめぐり合えなくなってしまったのはなぜだろうか? 「結婚モデル」を作成し、それらの要因を考えてみた。

Fig.1 未婚率の推移 出所：総務省統計局「国勢調査」



2、モデル（基本バージョン）の設定：

- ① コミュニティには男性エージェントと女性エージェントが存在
- ② このコミュニティでは途中で死亡したり、生まれたりしない。ほぼ同世代メンバーが一定の地域や職場である程度長く付き合っている状態をイメージ
- ③ 両性とも、ランダム生成した絶対評価の点数（変数名「魅力度」）が自分に付けられている
- ④ 両性とも、ランダム生成した結婚基準（変数名「結婚基準」）を持っている
- ⑤ 未婚の人は結婚相手を求めてランダムに動き回り、出会った人の中の1人とつきあってみるが、自分の結婚基準を満たしているか、互いにチェックしあい、そうであれば結婚する。そうでなければ、別の人を探す
- ⑥ 一度カップルになったら離婚しない
- ⑦ 男女比は1：0.95 とする（総務省統計局データより）
- ⑧ 変数「人口規模」と「視野」をコントロールパネルで設定する

3. シミュレーション結果：

3. 1 基本バージョン

3. 1. 1 結果

基本バージョンで、100人規模（男性100人・女性95人）、200人規模（男性200人・女性190人）、300人規模（男性300人・女性285人）をそれぞれV0.5（視野0.5）、V1（視野1）とV2（視野2）で、10回ずつ試行し、平均値をとった。

10ステップごとに出力した結果が Fig.2 である。

Fig.2 基本バージョン（規模別・視野別）

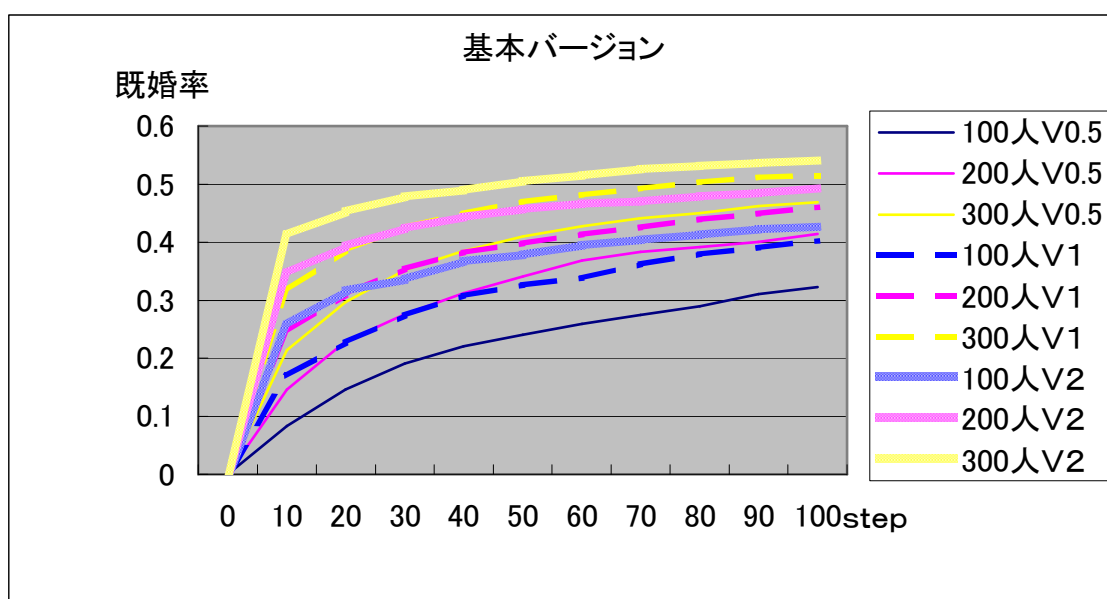


Fig2 から読み取れることは以下のとおりである。

- ① 人口規模が大きくなればなるほど既婚率は高まる。つまり、その他の条件が同じであれば、コミュニティの人口規模（実際の社会では都会か田舎か、あるいは大企業か中小企業かといった比較）においては、より人口規模の高いコミュニティに身を置いた方が原則的には成婚に有利になると考えられる。
- ② 視野が大きくなればなるほど既婚率は高まる。つまり、その他の条件が同じであれば、実際の社会では、パートナー探しの視野を広げ、活動を強化することが成婚に有利に働くと考えられる。
- ③ どの人口規模でも、視野規模でも、ごく初期のうちに大部分の成婚が達成され、後半になればなるほど増え方はなだらかになる。つまり、本当に結婚したいという気持ちを持っているのであれば、少しでも若い時期にパートナー探しに力を入れることが有利に働くことが考えられる。Fig.3 の表が示すとおり、規模が大きくなるほど、また視野が大きくなるほど、この傾向は強まる。

Fig.3 20step 目での達成率（100step 目との比）

	100 人規模	200 人規模	300 人規模
視野 0.5	約 45%	約 55%	約 63%
視野 1	約 56%	約 67%	約 75%
視野 2	約 75%	約 80%	約 84%

3. 1. 2 考察

ここまでのシミュレーション結果で、既婚率に対する人口規模や視野の大きさの影響が明らかになった。真剣にパートナー探しをするのであれば、なるべく人口密度の大きなコミュニティに身を置き、パートナー探しの強度を強め、接触を多くするように努めること、しかもそれらを若いうちから意識し、実行に移すほど結婚には有利に働くと考えられる。

しかし、実際の社会での現象はこうした理論と必ずしも一致しない。つまり、人口密度が高く、男女交際の強度も強いはずの大都会では地方の中堅都市などと比べるとむしろ未婚率が高いからだ。2000 年の国勢調査のデータによると、30 代前半の女性の未婚率（全国平均 26.6%）は、例えば山形県の 20.3%に対して、東京都では 37.6%となっている。

こうした現象を説明する説の 1 つとして「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」論（『結婚の社会学』（山田昌弘、97 年））が考えられる。この議論は、おおむね 1970 年以前、男女が交際する機会が限られていた時代には「身近な異性の中で一番好きな人と結婚する」という状況があったが、特に 1990 年以降、出会い系サイトや結婚相談所などが増え、男女の交際機会が増大したことが逆に人々を「もう少し待ってればもっといい人が現れるかもしれない」という気持ちにさせ、未婚化の要因になっているというものである。

本来、人口密度の高い結婚市場では理論的には既婚率が高くなるはずなのに、現状では理論通りになっていない要因の1つに、こうした「エージェントの目が肥える」というメカニズムが働いており、それが人口規模や視野の拡大のメリットを打ち消していることを次に検証したい。

3. 2 目肥バージョン

基本バージョンの設定を基本に、結果的に結婚しなかったものの過去に付き合っ結婚を検討した相手を「元カレ・エージェント集合」「元カノ・エージェント集合」に収め、最も魅力度の高かった人の魅力度の点数が自分の結婚条件になってしまうというルールを付け加えた。試行回数や結果の取り方は基本バージョンと同一である。

このルールで作ったモデルを「目肥バージョン」と呼ぶ。3-1と同様に結果をグラフ化したものが Fig.4 である。

3. 2. 1 結果

Fig.4 目肥バージョン（規模別・視野別）

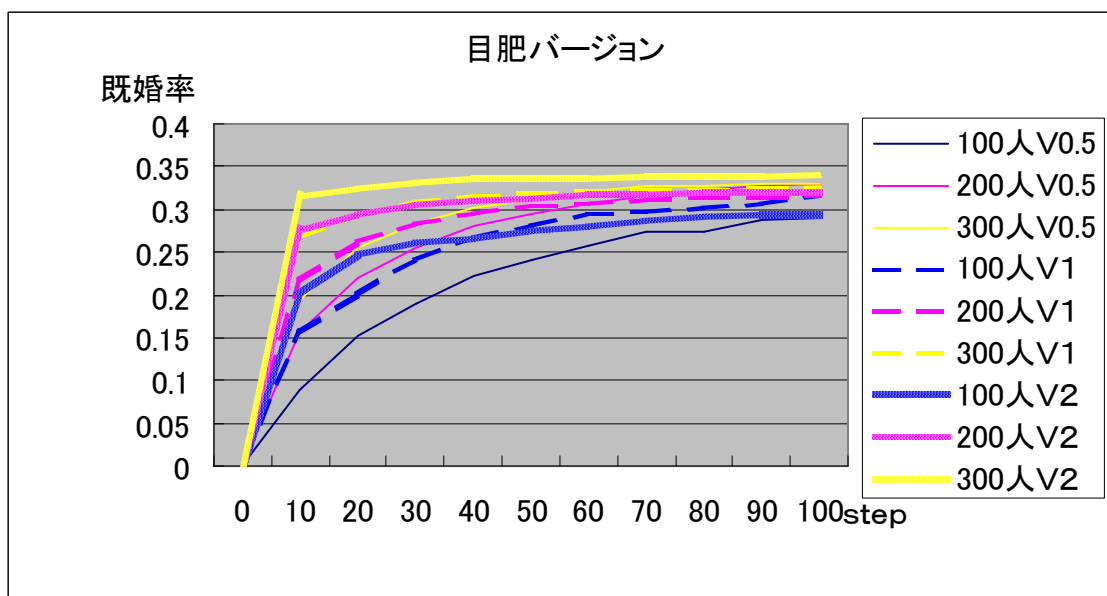


Fig.4 から読み取れる結果は以下のとおりである。

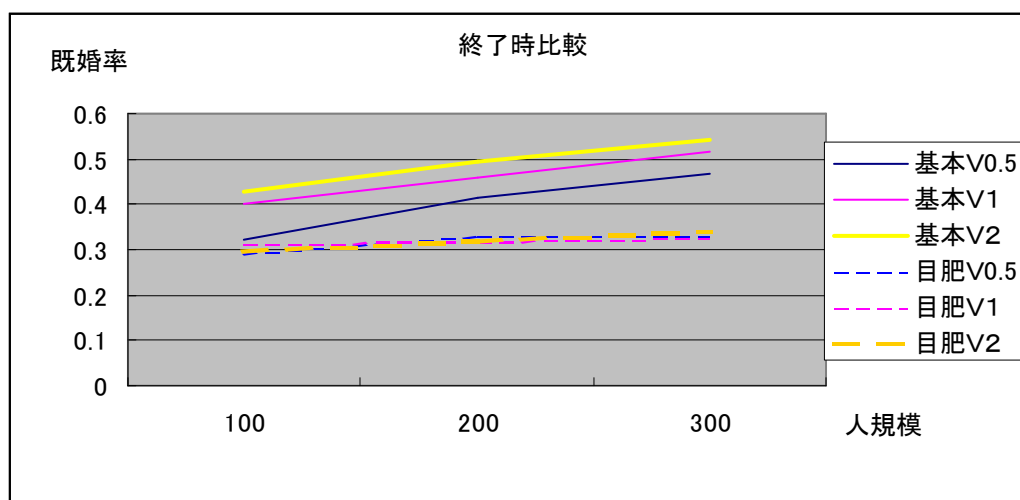
- ① 「目肥バージョン」では既婚率が伸びず、100 ステップ終了時で既婚率 30%前後までしか達成できない。
- ② 「基本バージョン」で見られた人口規模、視野規模の拡大によるメリットが「目肥バージョン」では大幅に低減される。さらに、場合によっては、逆転することもありうる。(例えば、100 ステップ目での 100 人V1 と 100 人V2)

3. 2. 2 考察

既婚率に対して「人口規模」「視野規模」の2変数が及ぼす影響は、「基本バージョン」と「目肥バージョン」では違うことがわかった。

このことを明らかにするために、Fig.5により、終了時（100ステップ目）の既婚率を比較してみる。

Fig.5 2バージョンにおける2変数の影響



「基本バージョン」では、人口規模、視野規模の拡大による効果が既婚率上昇に反映しているが、「目肥バージョン」では3本の折れ線がほぼ重なり合って、傾きもほとんどないに等しい。それどころか、同一人口規模で視野が大きくなるほど既婚率は低下するという逆転現象も見られる。

つまり、人口密度が高いところに身を置いたり、パートナー探しに積極的に取り組むことは理論的には既婚率を高めるが、実際の社会ではそういう営みがエージェントに「目が肥える」という状態をもたらし、本来期待できたはずのメリットの多くの部分を打ち消してしまうことを示している。

4. 結論

理論的には既婚率は結婚市場の人口規模やエージェントの視野が拡大すればするほど高まるが、実際の社会では、異性との交際機会が増えることにより、目が肥えて、結婚基準が厳しくなるというメカニズムが働いて、それらのメリットの多くが打ち消されてしまい、都会での既婚率を引き下げている可能性が示唆された。

もちろん、このモデルは実際の社会の結婚をめぐる人間関係のすべてを表現できているとは言えない。その最大の点はエージェントの魅力度の「絶対評価」であろう。我々の社会では常に「相対評価」が機能している。ある人物を評するとき、「ある人にとっては 50

点だけれど、別のある人にとっては 90 点」だからこそ、多くのカップルが成り立っている。

「あばたもエクボ」ということもある。また、今回、「魅力度」と「結婚条件」はそれぞれランダムに生成させたが、現実には二者にも相関があるだろう。

今回のモデルは残念ながら、こういう細かい状況をルールの中で設定することができなかったが、魅力度の高かった元恋人との出会いは単に輝かしい思い出になるにとどまらず、その後の人生に影響（ある意味で悪影響）を及ぼし続け、それが未婚化の 1 つの要因になっている可能性を示唆することができたと考える。

本研究の動機となった、パートナー探しにおける自らの経験を振り返っても、この結果はある程度、納得のいくものである。

参考文献

- ・ 『負け犬の遠吠え』（酒井順子、03 年）
- ・ 『結婚の社会学』（山田昌弘、97 年）
- ・ <http://www.ipss.go.jp/syoushika/seisaku/html/112a2.htm>